九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

宋詩の学問性

合山，究
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/9829

出版情報：中国文学論集. 1, pp.3-14, 1970-05-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

宋詩の学問性

合山究

一

宋代の詩が、六朝から唐へ連なる主情主義的詩風を払拭し、「理をもって詩をつくる」、「議論をもって詩をつくる」、「文字をもって詩をつくる」といわれるような主知主義的傾向へと大きな質的転換を遂げた理由の一つに、宋代士大夫の学問読書に対する信仰的なまでの執念をあげることができると思う。「読書万巻を破り、筆を下せば神あるが如し」という杜甫の詩句（「奉贈韋左丞二十二韻」）が、宋代の詩文に屢々引用されるのも、杜甫が「学」の人として、「才」の人李白以上に宋ひとの共感を得ていたからである。

詩において、生来のオリジナリティを重視するか、或いは客体としての学問に重きを置くかは、古来相容れ難い両極であるが、古くはおおむね天才論が優位を占め、詩は志を言うもの、性情を吟詠するものなどといわれ、個性を尊び情感の趣くままに作詩すべきであるとされた。曹丕の「典論論文」にいう「文は気を以て主となし、気の清濁には体あり。力強て至す可からず。諸れを音楽に譬うれば、曲度は均しく節奏は検を同じくすと雖も、引気の斉しからざるに至っては、巧拙に素あり、父兄に在りと雖も、以て子弟に移すこと能わず」、顔之推の「顔氏家訓」にいう「学問に利鈍あり。文章に巧拙あり。鈍学も功を累ぬれば、精熟するを妨げず。拙文は思いを研ぐも、終に嚚鄙に帰す。但だ学士と成れば、自ら人たるに足る。必ず天才に乏しくして、強いて筆を操ることなかれ」（文章篇）などの言葉は、まぎれもなく天才説の立場をとるものであり、詩文の優劣は、生得の才能が全てを決定し、後天的修業をいくら積んでも如何ともしがたいものであることを断言したものである。従って多くの場合、個性のままに胸臆の思いをすなおに詠ずることが重んぜられ、これに反して学問読書に頼って詩を作り上げることは屢々鄙しめられた。例えば沈約が、「子建『函京』の作、仲宣『灞岸』の篇……並びに胸情を直挙して、詩史に傍るにあらず」（「謝霊運伝論」）といい、鍾嶸も、「情性を吟詠するに至っては、亦た何ぞ用事を貴ばん。『君を思うて流水のごとし』即ち是れ即目。『高台悲風多し』亦た惟だ見るところ。『清

晨隴首に登る」羌故実なし。「明月積雪を照らす」拒ぞ経史に出でん。古今の勝語を観るに、多く補仮にあらず、皆直尋に由る」（「詩品」）といって、当時の詩人が書物を用い典故を貴ぶのを非難しているのは、それを端的に言い放ったものである。また唐代に入っても、皎然は「語を偷むは最も鈍賊たり」、「経史を用うと雖も書の生を離る」（「詩式」）といい、韓愈は「惟だ陳言をこれ務めて去るは、戛々乎として其れ難いかな」（「答李翊書」）、「惟れ古えの詞における必ず己れより出づ。降りて能くせず乃ち剽賊す」（「南陽樊紹述墓誌銘」）といい、前人の詩句を安易に踏襲することを厳に警め、また元稹は杜甫の詩を評して「杜甫は天材頗る絶倫。詩巻を尋ぬる毎に情の新しむに似たり。渠の当時の語を直道し、心源をして古人に傍らしめざるに憐たる」（「酬孝甫見贈十首」の二）と賞めている。

このように、宋以前の詩論では、たとい実際は書史を利用することが屢々であったとしても、なお原則的には心情吐露の個性的作風が尊ばれ、学問読書に依拠した詩作は極力排斥されていて、積極的に「学」の必要性を叫び模倣を肯定したものは殆どいなかったといってよい。[1] 典故を頻用したことで有名な六朝の徐陵や庾信、初唐の四傑、晩唐の李商隠なども、やはり基本的には天才論の範疇にあって、才情を重んじているのであり、宋ひとのように学問読書の必要性を露骨に唱えているわけではなかった。

ところが、宋代に入って、詩は天才説から一転して学問読書による後天的才能を重んずる方向へと急速に傾斜してゆく。つまり「才」から「学」へと転ずるわけである。詩論においても、万巻の書を読み、学問を通して、詩材を蓄え、詩想を錬ることの必要性、或いは前人の作品を熟読玩味し、自らの詩嚢を肥やすべきことが繰返し強調される。このような詩論は、黄庭堅及び江西詩派において特に強調されるが、しかし彼らに至って突発的に出現したわけではなく、そこにはそれを生み出すだけの社会的要因が存在する。

二

五代の戦乱を鎮め、天子独裁の中央集権体制を確立した宋朝は、太祖趙匡胤の「朕は武臣をして悉く書を読みて以て治道に通ぜしめんと欲す、何如」（「宋史」本紀建隆三年）、「宰相は須らく読書人を用うべし」（「通鑑長篇」乾徳四年五月乙亥の条）などの言葉に象徴されるように、文治主義を治政の根本方針とし、科挙制度の整備に務め、天子自ら学問を奨励したため、ここに文官優位、儒臣尊重の読書人社会が出現した。新たに抬頭した読書人（士大夫）階級の多くは、自らの学力によって科挙の難関を突破して官僚となり、立身出世を成し遂げたいわば成り上り者であった。太宗朝の知制誥王禹偁、真宗朝の翰林学士刑昺、仁宗朝の参知政事孫抃などは、農家の子弟であったといわれるが、もとより当時の進士の大半は、彼らのように無名の庶民出身であったのである。まさに科挙万能、学問万能の時代になったわけであり、才能さえあれば、たとえ微寒の出身でも宰相にすらなることができた。例えば、仁宗朝の副宰相（参知政事）范仲淹は、幼くして父を失い、母が他の家に再嫁してより、非常な辛酸を嘗めたが、彼は、「南都の学舎に処りて、昼夜苦学す

ること五年。未だ嘗って衣を解きて寝に就かず。夜或いは昏怠すれば、輒ち水を以て面に沃ぐ。往々饘粥充たず、日昃きて始めて食らう。同舎生或いは珍膳を饋れども、皆拒みて受けず」（宋名臣言行録」巻七之二）といわれるような猛烈な勉学の末に、進士に及第し、遂に参知政事にまでのし上ったのである。このように、刻苦勤学の末に、貧苦の中から身を起し、著名な官僚や学者になった人々の事例は、まことに枚挙に暇がない程である。[2]

また読書人の強烈な物質主義的功利観を示す「勧学」の詩文が、頻りに作られ始めたのも、科挙制社会の宋代においてであり、寡見の及ぶかぎり、宋以前には中唐の白楽天・孟郊に各一首あるにすぎない。かの有名な真宗皇帝の勧学の詩「家を富ますに良田を買うを用いず。書中自ら千鍾の粟あり。……妻を娶るに良媒なきを恨むことなかれ。書中女あり、顔玉の如し云々」は、今日では立身出世意識を露骨に煽るものとして嫌悪されがちであるが、当時はむしろ、天子自らが新興読書人階級の上昇気運をかきたて、その向上意欲を奨励する極めて健康な社会意識の中から生れたものであったと言えよう。これに類するものとして、北宋中期に限っても、仁宗の「勧学文」・張詠の「勧学篇」・陳襄の「仙居勧学文」・王安石の「勧学詩」・司馬光の「勧学歌」・柳永の「勧学文」・趙抃の「勧学示江原諸生」・范祖禹の「勧学劄子」・周行己の「勧学文」など、多くの作品を挙げることができる。

しかしながら、宋代士大夫の学問は、科挙及第という現実的目的の達成にのみ止まるものではない。科挙に及第して官僚となってからも、或いは富貴栄達の道に繋がる科挙の学を廃棄してからも、士大夫として誇り高く存立する限りは、学問読書を避けることは決してなく、知的エリートをめざし、学者文人としての声誉を求めて、更なる努力をたゆみなく続けなければならない。「君子の学ぶや、それ一日として息むべけんや」（欧陽修「雑説」）である。ここに学問読書をもって職業とみなす士大夫（読書人）意識が育まれてくる。欧陽修の「感興」の詩には、農耕や蚕織に代って、学問文章に励むこと、それが士大夫たる所以であると明白に述べている――

仕宦して寸祿を希うは
饑寒に迫らるるなきを庶うなり
書を読みて文章を為るは
もと以て耕織に代うるなり
……
君子は量能を貴ぶ
軽々しく人の食を食むことなかれ

このような士大夫意識は、次第に学問至上主義的な執念じみた情熱を生むようになる。例えば、文同の「夜学」の詩（「丹淵集」巻八）に、

已に名を第するを叨うして放ぐに堪えたりと雖も
未だ根原に到らざれば豈に敢て休めんや
文字は一牀　灯は一盞
只だ応に前世は是れ深き讐なるべし

というのは、このことを極めてよく物語るものであるが、その他、黄庭堅が、「士大夫は、三日書を読まざれば、自ら語言に味

なく、鏡に対うも亦た面目憎むべきを覚ゆ」といい、米元章が、「一日書を読まざれば、便ち思いの渋るを覚ゆ」といって片時も書を廃さなかったという逸話（「巖棲幽事」）など、数多くの事例をあげることができる。まさに「斎東野語」に黄庭堅の言葉として引くごとく、「士大夫の子弟は、読書種子をして断絶せしむべからず。才気ある者出づれば、便ち當に世に名あるべし」（巻二十「書種文種」）という学問万能の時代であったのである。

時代が降るに従って、次第に学者が簇出し、学派間の対立が深刻になると、学問の内容や目的が云々されるようになるが、士大夫の士大夫たる所以は、以上述べたごとく、まず学問読書をすることそれ自体にあったのである。

三

出版印刷の普及も、宋代知識人の旺盛な読書欲を煽った外因の一つに挙げられるであろうが、とにかく、彼らの読書は、経史を中心としたオーソドックスな典籍ばかりでなく、世に存するありとあらゆる書物に及んだ。例えば、呉越王家の後裔で西崑派の詩人銭惟演は、「平生ただ読書を好み、坐すれば経史を読み、臥すれば小説を読み、厠に上れば小辞を閲し、頃刻も書巻を釈てず」（「帰田録」巻二）といわれ、また欧陽修の友人劉敞は、「公、学において博し。六経・百氏・古今の伝記より、下は天文・地理・卜醫・数術・浮図・老荘の説に至るまで、通ぜざる所なし」（「居士集」巻三五に載す「集賢院学士劉公墓誌銘」）といわれ、かの王安石は、「我萬巻の書を読み、識り尽す天下の理」（「擬寒山拾得」）、「某百家諸子の書より、難経・素問・本草・諸小説に至るまで、読まざる所なし」（「答曾子固書」）といい、その博学多識を自負している。かかる幅広い雑学は、あくなき知識欲にかられた宋代読書人の多読主義的側面を物語るものであるが、多かれ少かれ、宋代の詩人があまねく持ちあわせるものであった。清の趙翼が蘇軾の詩を評して、「坡公は、荘列諸子及び漢魏晋唐諸史に熟す。故に遇う所に随って輒ち典故ありて以てその援引に供す。此れ臨時の検書者の能く弁ずる所にあらざるなり」（「瓯北詩話」巻五）というがごとくである。

このような多読主義的な読書法に対して、宋ひとの読書法のもう一つの側面として精読主義的方法がある。蘇軾は、「与王郎書」（「艇斎詩話」に引く）においていう。

少年の学を為す者は、一書ごとに皆数次の読を作す。書の富は海に入るが如く、百貨皆あり。人の精力は兼ね収め尽く取る能わざれば、ただその欲求する所のものを得るのみ。故に願わくは学者は毎次一意を作して之を求めんことを。もし古今の興亡治乱・聖賢の作用を欲求すれば、且只此の意を作して之を求め、餘念を生ずることなかれ。又格別に一意を作して事迹・文物の類を求むるも亦たかくの如くす。他は皆これに倣え。学成りて八面に敵を受くるが若きは、渉猟者と日を同じうして語る可からず。

ここにいう読書は、いはば人生の為の読書であり、従前の記誦を主体にした読書法とは自ら趣きを異にするものであるが、宋においてはこのように自己の主体性の確立をめざして思想内容にまでたち入った深い思索が要求される。蘇軾はいう、「旧書は百回の読を厭わざれ。熟読深思すれば子自ら知る」（「送安惇

秀才失解西帰」詩）と。かく「熟読深思」して、哲学的思索を好む宋代の詩人は、屢々経典に注釈を施し、唐ひとを軽んじて「唐人は詩に工なるも道を聞くに陋なり」（蘇轍「詩病五事」）とまで言っている。このように精読主義的読書は、宋代文学の哲学性や思想性とも相関連する面が多分にあるが、作詩作文の典型として学ぶべき古典作品に対しても、徹底的に熟読玩味を加える風潮を生んだ。例えば、唐庚が、「作文は當に司馬遷を学ぶべし。作詩は當に杜子美を学ぶべし。二書はまた須らく常に読むべし。所謂一日として此の君なかるべからざるなり」（「却掃編」下）というように。

かかる宋代士大夫の学問読書に対する並々ならぬ情熱が、当時の文学論に反映しないはずはない。西崑派の楊億は、「凡そ文章を為るに用いる所の故事、常に子姪諸生をして出處を検討せしめ、毎段小片紙を用いて之を録せしむ。文の既に成れば則ち録する所を綴粘して之を蓄う。時の人これを衲被という」（「宋名臣言行録」巻四に引く「呂氏家塾記」）といわれているが、これは、「多く書冊を簡び閲し、左右に鱗次して、獺祭魚と号し」た李商隠のやり方を踏襲したもので、主として四六文を作るときの創作方法であったとみられる。劉攽は、典故を調べるのに簡便な「初学記」を愛して、「止だに初学のみに非ず、終身記となすべし」といったといわれ（司馬光「続詩話」）、「看多、做多、商量多」の三多で有名な歐陽修は、「作詩は須らく多く古今の人の語を誦すべし。独り詩のみならず。その他の文字も皆然り」（「試筆」）といい、また文章について、「他の術なし。唯だ読書に勤めて多く之を為ればおのずから工なり。世人の患は文字を作ること少なく、又読書を嬾り、一篇の出づる毎に、即ち人に過ぐるを求む」といい、蘇軾もこれを肯定している（「東坡志林」巻一）。蘇軾は、自ら行雲流水の如き才能を誇ったが、時折、「別来十年学ぶこと厭わず、萬巻を読破して詩愈々美なり」（「送任伋通判黄州、兼寄其兄孜」詩）などといい、また書法についていった言葉ではあるが、「退筆山のごときも未だ珍とするに足らず、読書万巻にして始めて神に通ず」（「柳氏二外甥求筆跡」詩）というのも、学問読書の偉大な効用を教えたものである。

四

上述してきたような学問読書を尊重する時代的風潮をバックに、これを最も重視した詩人黄庭堅が登場する。「それ士は一日として学ぶこと無かる可からず」（黄集一三「洪州分寧県藏書閣銘」）、「君子は一日として学ばざること無きなり。豈にただ日ならんや、一時として学ばざること無きなり。豈にただ時ならんや、須臾も学ばざること無きなり。学なる哉身なる哉、身なる哉学なる哉」（黄集一三「優仕斎」）という程学問を重んじた彼は、天才説を真向うから否定し、「才」は学問によってこそ成るものだと明白に主張した。

天は才を生ずるに難し。而れども才ある者は学問琢磨を須ちて以て晩成の器に就る。その能わざる者は則ち怨を天に帰するを得ざるなり。世は実に才を須つも才ある者は未だ必ずしも用いられず。君子は未だ嘗って世に用いられざるを以て学問を廃せず。それ自ら廃惰せんか、則ち怨を世に帰することを得ざるなり。（黄豫章文集巻一九「答李幾仲書」）

このように学問による自己陶冶によって、天才の領域に到達で

きるとする黄庭堅は、芸術創作においても、学問読書による後天的な練磨をことに重んじたのである。彼は「読書万巻を破る」ことこそが、芸術（詩文書画）の創造に必須の条件であり源泉であることを実に屢々語っている[3]。そのうち彼が詩文において学問読書が如何に必要であるかを力説した言葉をいくつかあげることにする。

詩意の高勝なるは、要ず学問中より来るのみ。後来の詩を学ぶ者は、時に妙句あるも、譬えば眼を合じて象を模づるが如く、触るる所に随って体に一處を得れば、即似ならざるに非ざるも、要且ず是ならず。若し眼を開けば則ち全体之を見る。古人の處に合して証を取るを待たざるなり。

（「苕溪漁隠叢話」前集四七に引く）

寄詩、語意老重、数過読みて、手を去る能わず、継いで以て歎息す。少しく意を読書に加うれば、古人にも到り難からざるなり。諸文亦た皆好し。但だ古人の縄墨を少くのみ。更に司馬子長・韓退之の文章を熟読すべし。（「答洪駒父書」）

学詩の工夫は、多く書を読みて貫穿するを以てすれば、自ら當に平淡に造るべし。勤めて蕭賈劉向の諸文字を読むべし。論議文字を学作ばんとすれば、更に蘇明允の文字を取りて之を読め。古文は要ず気質渾厚なるべく、太だしくは雕琢することなかれ。（「餘師録」に引く「与洪駒父書」）

送る所の新詩、皆興は高遠に寄するも、但だ語の生硬にして律呂に諧わず、或いは詞気初め意を造す時に逮ばず。此の病は亦た只だ是れ読書未だ精博ならざるのみ。長袖善く舞い、多銭善く買うは虚語ならざるなり。……往年嘗って東坡先生に文章を作るの法を請問す。東坡云う、但だ『礼記』の『檀弓』を熟読すれば當に之を得べし、と。既にして『檀弓』二篇を取りて読むこと数百過、然る後後世の文章を作りて古人に及ばざるの病を知ること、日月を観るがごときなり（「与王観復書」）

若し楚辞を作りて古人に追配せんと欲すれば、直だ須らく楚辞を熟読し、古人の用意曲折の處を観て之を講学すべし。然る后筆を下せば、譬えば巧女の文繍の一世に妙絶たるがごとし。錦を作らんと欲すれば必ず錦機を得て、乃ち錦を成すのみ。（「餘師録」に引く「与王立之書」）

このように彼は、作詩作文の要諦として、該博精密に学問読書を積み、徹底的に古人の創作法を学ぶことを唱え、「詩は工みにして学の進めるを知る」（内集巻十「次韻子瞻和王子立風雨…」詩）といい、詩が未熟なのは、「読書未だ萬巻を破らず。古人の文章を観て、未だ尽くその規模を得ること能わざる」（跋書柳子厚詩）からであるという。けれども彼の読書目的は、ただ単に文学技巧の徹底的習得のためにのみあったのではない。文学創作の根底である心性の練磨もまた、彼にとっては絶対にないがしろにすることのできないものであった。

読書は須らく精しく一経を治め、古人の関捩子を知るべし。然る後見る所の書伝はその指趣を知り、世故を観るに吾が術内に在り。古人の所謂膽は大ならんことを欲するも心は小ならんことを欲するなり。世の毀誉愛憎を以て動かず、これ膽の大ならんことを欲するなり。法に非ざれば言わず、道に非ざれば行わず、此れ心の小ならんことを欲するなり。

文章は乃ちその粉澤なり、要須ずその根本を探るべし。本固ければ則ち世故の風雨も漂揺すること能わず。古の特立独行する者は此の道を用うるのみ。（「与洪駒父書」）

人格主義的道徳主義的リゴリズムに満ちた彼のこのような言葉は、随所にみられ、例えば、「経を治むるの法は、独りその文章を玩ぶのみならず。義理を談説するのみ。一言一句皆以て心を養い性を治む……此の心術を以て文章を為れば、意の如くならざるなし」（「書贈韓瓊秀才」）、「義理を思えば則ち精ならんことを欲し、古今を知れば則ち博からんことを欲し、文を学べば則ち古人の規模を観る」（「餘師録」に引く）などといい、文章を作るには、まず経史を熟読して人格の陶冶を積むことが肝要であると主張する。さらにそれは、彼が徐俯の詩についていった「その未だ至らざるものは、経術を探ること未だ深からず、老杜・李白・韓退之の詩を読むこと熟せざるのみ」（「与王観復書」）や、「読書は多きを求むることなかれ。要須ず貫穿すべし。使し義理融暢して筆を下す時は、塞吃せざるに庶し」（「餘師録」に引く）や、「近世の少年、肯て深くは経史を治めず。徒らに取りて詩を助く。故に遠きを致さば則ち泥む」（「蠖斎詩話」にひく山谷「与方蓼書」）などの言葉にも明白に述べられている。さらにまた黄庭堅は、読書によるきびしい鍛錬を説き、「与王子予書」でその読書法を次のように述べている。

比来読書何似を審らかにせず、想うに道義を以て粉華の兵に敵すれば、戦勝久し。古人に言あり、「敵を一向に并せて、千里に将を殺す」と。要須ず心地に汗馬の功を收むべし。読書して乃ち味あれば書策を棄てて遊息するとも書味は猶お胸中にあり。久しくして乃ち古人の心を用うる處を見る。此の如くなれば則ち心を一両の書に尽せば、その餘は竹節を破るが如く、皆刃を迎えて解くなり。

これを見ても彼がただ漫然と博く深く学ぶことを説いたものではないことがわかる。並々ならぬ読書の修練を経て、自由自在に物事の核心を突き、打てば響くように活用しえて始めて読書の功を得たと言えるのである。彼はこのように屢々読書を変幻自在な孫子の兵法に譬えているが、詩作ももとよりかかる修練を経なければ十分なものとはいえないのである。

蓋し俗を以て雅となし、故きを以て新となせば、百戦百勝すること孫呉の兵のごとし。棘端の以て鏃を破るべきは、甘蠅飛衛の射のごとし。これ詩人の奇なり。（内集巻十二「再次韻」序）

高子勉、詩を作るに杜子美を以て標準となし、一事を用うること軍中の令のごとく、一字を置くこと関門の鍵のごとし。而も之を充たすに博学を以てし、之を行うに温恭を以てす。天下の士なり。（「跋高子勉詩」）

以上のように、黄庭堅の読書に対する態度は、実に峻厳をきわめたものであったが、彼がかく学問読書を強調した外的要因としては、王安石の科挙改革によって、読書量の乏しい新興官僚層が抬頭し、旧来の文化土壌に育った幅広い教養をもつ彼ら文化人が、きびしい圧迫にさらされた当時の社会状況への反撥が挙げられるかもしれない。

五

李商隠の流れを汲んで夥しい典故をちりばめた西崑体の難解な詩風を一掃し、現実感にみちた平明直截な詩風の確立を目標とした宋詩も、学問読書を重んずる当時の風潮によって、次第

にまた難解なものへと転じ、それは黄庭堅の詩において極った。形而上的思惟の難解さは暫く置くとして、典故使用の面においても、従前とは違った意味で難解なものになったのである。西崑体の詩が、絢爛華麗に典故をちりばめ非現実の世界を志向するのに対して、彼らはあくまでも日常性に立脚し、卑近な現実を詠いながらも、典故を駆使し学問を鋪張して、日常性を昇華し抽象化しようとしたところにその特色がある。それ故、肺肝をついて溢れ出るようなみずみずしい抒情性はなく、きわめて衒学的ないし高踏的な雰囲気を醸し出している。今、黄庭堅の詩におけるそうした典故使用の特徴ある例を幾つか挙げると、

（例一）平生幾輛屐　身後五車書　（「和答銭穆父詠猩猩毛筆」）

幾輛屐は「晋書」阮孚伝の「未知一生能著幾輛屐」を、五車書は「荘子」天下篇の「惠施多方、其書五車」をふまえる。猩々のことを人事に借りて詠ったもので、「人間の履（くつ）を喜んではくという猩々は、生前果して何足の履がはけたか知らないが、死してその毛は筆となり、これを用いて厖大な書物が作られた」の意。

（例二）管城子無食肉相　孔方兄有絶交書（「戯呈孔毅父」）

管城子は韓愈の「毛穎伝」により、筆を指す。食肉相は「後漢書」班超伝の「飛而食肉、萬里侯相」をふまえる。孔方兄は、晋の魯褒の銭神論に「親之如兄、字曰孔方」をふまえ、あなあき銭を指す。絶交書は嵇康に「与山濤絶交書」がある。二句は「文筆嫁業では出世ものぞめず、金銭とは全く縁を絶った状態だ」の意。

（例三）春風春雨花経眼　江北江南水拍天（「次元明韻寄子由」）

春風春雨と江北江南とは詩家の常用する文学用語。これに杜甫の「且看欲尽花経眼」の下三字、韓愈の「海気昏昏水拍天」の下三字をそれぞれ添えて、まとまった詩句としたもので、「春風春雨のなかを行けば春の花は眼前に移り変わり、江北江南の地方には水がひたひたと天にまで打ち寄せている」の意

このような黄庭堅の造句法を最も特徴的に示しているものは、有名な「奪胎換骨」・「點鉄成金」法である。彼は「答洪駒父書」において、

自ら語をつくるは最も難し。老杜の作詩、退之の作文、一字として来処なきはなし。蓋し後人読書少し、故に謂えらく韓杜は自ら此の語を作りしのみ、と。古の文章を為るものは、真に能く万物を陶冶す。古人の陳言を取りて翰墨に入ると雖も、霊丹の一粒の如く、鉄を點じて金と成すなり。

といっている。また「冷斎夜話」その他に山谷の言葉として引くところの

詩意は無窮にして人の才は有限なり。有限の才を以て無窮の意を追えば淵明・少陵と雖も尽す能わざるなり。然れども其の意を易えずしてその語を造る、之を換骨法と謂う。その意を規模して之を形容す、之を奪胎法と謂う。

もそれを示すものである。

もっとも、「古人の意を用いて、これを點化し」精彩ある詩句とするこのような作詩法は、従来なされていなかったわけではなく、「『塵史』に云う。古の善く詩を作る者は、工みに人の語を用い、渾然として己れに出づるがごとし。予李杜において之を見る云々」（「苕溪漁隱叢話後集」巻二六東坡一）といわれるように、完全に独創的な詩人でないかぎり誰でも多少は行うことであって、すでに唐の劉禹錫が「来歴なき字は前輩未だ嘗っ

て用いず」といい、北宋の孫覚が「杜詩は一字として来歴なきはなし。」といったとされ、[5] 王安石・蘇軾なども、この技術を時折用いていたといわれる。けれども見方をかえればこのような作詩法は、「特に剽竊の黠者のみ」（『滹南詩話』巻三）などといわれているように、前人の詩句を盗むものに他ならず、これを屢々用い、またこれをあからさまに主張するのは、後めたく憚られがちなことであったろう。

ところが、黄庭堅はこれを公然と主張し、先行作品の発想を鋭意利用し改作することによって、新しい生命をもたせることを説いたのである。その作詩法の実例を一二挙げると、まず、前人の詩をほぼ全体的に改作した例として、

徐陵「鴛鴦賦」　黄庭堅「睡鴨」

山雞映水那自得——山雞照影空自愛
孤鸞舞鏡不成雙——孤鸞舞鏡不作雙
天下真成長合会——天下真成長会合
無勝比翼両鴛鴦——両鳧相倚睡秋江

また、前人の律詩をたちわって絶句二首に改作した例として、

白居易「寄行簡」　黄庭堅「謫居黔南十首」のうち

相去六千里——相望六千里
地絶天邈然——天地隔江山
十書九不達——十書九不到
何以開憂顔——何用一開顔

○

渇人多夢飲——病人多夢醫
饑人多夢餐——囚人多夢赦
春来夢何處——如何春来夢
合眼到東川——合眼在鄉社

がある。このように数句から一詩をそっくり利用した例は、それほど多くはなかろうが、一両句を巧みに改作し、自家薬籠中のものとして活用させたものなら数えきれない程たくさんある。あらゆる古典作品をみずからの新詩境開発のための武器として積極的に利用した彼のこうしたやり方は、いわば古典の創造的模倣であり、一見安易なように見えるが、実はきびしい修練と高度の技巧があって、始めてかように厖大な材料を自由自在に駆使し、自らの詩的世界を築くことができるのである。「黄庭堅は好んで南朝人の語を用い、専ら古人の未だ使わざるの事を求む。又一二の奇字もて綴葺して詩を成す」（「臨漢隠居詩話」）とか、「黄魯直、始め専ら古人の才語を取りて以て事を叙す。造次の間と雖も必ず工ならんことを期し、遂に以て名家たり」（「曲洧旧聞」巻九）とかいわれるように、非常な鍛錬によってこの峻厳な技法を身につけた彼は、「語人を驚かさずんば死すとも休まず」という杜甫の言葉を愛し、自らも「文章は最も人後に随うを忌む」（外集補巻四「贈謝敞王博喩」）、「人に随って活を作せば終に人に後る。自ら一家を成して始めて真に逼る」（外集巻二「以右軍書数種贈邱十四」）、「古法を領略して新奇を生ず」（内集巻七「次韻子瞻和子由観韓幹馬」）などといっている。これらの言葉からも、学問の力によって、何が何でも前人を凌駕しようとする宋代知識人の意気込みを見ることができる。

時代が降るに従って、優れた前人の作品がつぎつぎと山積し、

後生の詩人の前に魅惑的な詩作の宝庫として提供される。殊に漢語の特色から、中国の詩は、古典を利用しやすい傾向にあり、思想的にも内心から信奉していなくても、安易に既成思想にもたれかかって自己の感情を語ることができる。そういう意味において、表だっては主張されなくても、典故を用いたり前人の作品を巧みに利用し自己の作品として鎔鑄する創作法が、中国詩の発展に寄与する度合は、もともと少なからぬものがあったと考えられる。そしてそれを公然と主張した彼の「奪胎換骨」・「點鉄成金」論が、以後江西詩派に承け継がれ、紛々たる論議をよびながらも、堂々とまかり通るところに、「才」よりも「学」を重んじた宋代詩論の特色が窺えるのである。

六

学問読書を尊重する宋代詩論の帰着点を示した黄庭堅の「奪胎換骨」・「點鉄成金」論は、北宋末期以後、閉塞された社会状況の中で詩作していた「才」に乏しい小詩人たち（江西詩派）に継承された。現実社会への参加を閉ざされたこれらの詩人の多くは、自己の小さな世界に閉じこもり、黄庭堅や杜甫の作詩法をひたすら模倣したのである。黄庭堅よりやや後れた唐庚（一〇七一～一一二一）は、「凡そ作詩は平居須らく詩材を收拾して以て用に備うべし。退之は『范陽盧殷墓銘』を作りて云う、『書に於いて読まざるところなし、然れども正に資を用いて以て詩を為る』と。是なり」とか、「詩疏は閲せざるべからず。詩材最も多し。その諺語を載す、『絡緯鳴き懶婦驚く』の類、尤も宜しく詩用に入るべし」とか、「楽府の解題は、熟読すれば大いに詩材あり。余が詩に云う、『時難ければ将に酒を進めんとし、家遠ければ楼に登ることなかれ』と。古楽府の名を用いて対を作すなり」（「唐子西文録」）とかいい、常々書物の中から詩材を捜して蓄えておき、いざ詩作する時に備えるべきであると、公然と書物に依拠した作詩法を主張する。また韓駒（？～一一三五）は、「但だ近年の人家の子弟は往々その小しく才あるを恃みて更に書を読むを肯せず。但だ詩を作りて古人の地位に到らんと要するも、殊に知らず古人未だ書を読まずんばあらざることを。大いに愧嘆すべきのみ」、「今人に小時に文名の大いに著われ、久しくして振わざるものあり。その咎安くに在りや。公曰く、他なし、学を止めしのみ」（「詩人玉屑」巻五）といい、学問読書が詩作に如何に不可欠のものであるかを強調している。かくて江西詩派が詩壇を牛耳った北宋末期から南宋初期にかけては、学問至上主義的作風が依然として横行する。しかし南宋中期以後になると、このような創作法を肯定する者、反対する者、両者を折衷する者に分かれ、「才」と「学」の問題は紛々たる論議をよんだのである。[6] 紙数の都合で二三の用例しか挙げえないが、例えば、江西詩派の流れを汲む費袞は、学問を重視して「作詩は當に学を以てすべく、當に才を以てすべからず。詩は文の比に非ず。若し曾って学ばざれば、則ち終に詩に近からず。古人或いは文を以て一世に名あるも、詩の工ならざる者は皆才を以て詩を為るが故なり」（「梁谿漫志」）といっている。これに対して朱子は、「詩は固より学ばずして之を能くする」ものだとして屢々反対しているが、ことに宋末の厳羽の反対論「夫れ詩に別材あり、書に関するに非ざるなり。詩に別趣あり、理に関するに非ざるなり云々」（「滄浪詩話」詩辨）というのは余りにも有

名である。なお「才」・「学」折衷論の例としては、「対牀夜話」に蕭徳藻の言葉として引かれている「詩は書を読まざれば為るべからず。然れども書を以て詩を為れば可ならざるなり」などがあげられる。

宋以後の詩論においても、「才」と「学」との問題は、きわめて重要な課題であった。それについては郭象虞の「滄浪詩話校釋」(二九～三三頁)に夥しい用例が挙げられ、また銭鍾書の「宋詩選註」序、青木正兒の「清代文学批評史」などにもかなりの言及がある。明代擬古派の前後七子は、宋詩に対する反動として学問を否定し才情を重んじたが、作詩の典型を前人にもとめ模倣を肯定している点はやはり宋以来の伝統といえる。清代には、王漁洋の「才」に対して「学」で詩を作ったといわれる朱彝尊、「学」の重視を主張した沈徳潜に対して天然の性情を尊んだ袁枚、性霊説に根ざした趙翼に対して専ら学問を重んじた翁方綱などが知られている。

以上小稿は、宋以後の詩論に論議をよぶ「才」・「学」問題の源泉ともいうべき宋詩の学問性についていささか検討を加えたものである。

註

(1)但し、先人の作品を利用して詩を作ることを表明した言葉が、宋以前に全くみられないわけではなく、例えば、杜甫の「熟精文選理」(「宗武生日」)、「未及前賢更勿疑、遞相祖述復先誰」(「戯為六絶」)、韓愈の「無書不読、然止用以資為詩」(「登封県尉盧殷墓志」)、劉禹錫の「後輩業詩即須有據」、「為詩用僻字須有来處」(韋絢「劉賓客嘉話録」)などは、学問による作詩を肯定した発言であるといえよう。けれども、このような例は極めて数少ないし、またその主張も宋ひとのように積極的なものではない。

(2)その一例として、胡瑗・石介・欧陽修・孫復・徐績などを挙げることができる。

(3)詩論においては、「東坡道人在黄州時作、語意高妙、似非喫煙火食人語、非胸中有萬卷書、筆下無一点塵俗気、孰能至此」(「跋東坡楽府」)、「景文胸中有萬卷書、筆下無一点俗気」(「書劉景文詩後」)、「亀父……力学有暇、更精読千卷書、乃可畢茲能事」(「書旧詩与洪亀父跋其後」)など。書論においては、「余謂東坡書、学問文章之気、鬱々芒々発於筆墨之間、此所以他人終莫能及爾」(「跋東坡書遠景楼賦後」)、「王著……若使胸中有書数千卷、不随世碌々則書不病韻」(「跋周子発帖」)など。

画論においては、「大年……若更屏声色衒馬、使胸中有数百卷書、便當不愧文与可矣」(「題宗室大年永年画」)、「胸蟠萬卷夜光寒、筆倒三江硯滴乾」(内集巻七「子瞻去歳春侍立……」詩)などがあげられる。

(4)黄庭堅の王学批判は、「談経用燕説、束棄諸儒伝」・「先皇元豐末、極厭士浅聞」(内集巻四「奉和文潜贈無咎篇末……」詩)などにみられ、陳師道のそれは「後山文集」の「送刑居実序」にみられる。詳しくは拙稿「蘇軾の文人活動とその要因」(九州中国学会報巻一四)参照。

(5)「山谷内集」巻一「古詩二首上蘇子瞻」の任淵の注に「孫莘老云、老杜詩、無両字無来歴、劉夢得論詩、亦言無来歴字、前輩未嘗用、山谷屢拈此語、蓋亦以自表見也」という。

(6)例えば、「自古詩人文人、大抵皆祖述前人作語」(周紫芝「竹坡詩話」)

「学詩須是熟看古人詩、求其用心處、蓋一語一句不苟作也」（「詩人玉屑」引く「漫斎語録」）、「天下書雖不可不読、然慎不可有意於用事」（「却掃編」下）、「自唐以来、詩人寖盛、有得于天才之自然者、有資于学問而成之者云々」（韓元吉「南澗甲乙稿」巻一四「張安国詩集序」）、「学有餘而約以用之、善用事者也、意有餘而約以尽之、善措辞者也」（「白石道人詩説」）、「詩悪踏襲古人之意、亦有襲而愈工」（「臨漢隠居詩話」）、「文章最忌百家衣、火龍鋸蔽世不知」（陸游「次韻和楊伯子主簿見贈」詩）、「古詩出於情性……今詩出於記聞博而已」、「（江西詩派）資書以為詩失之腐、（晩唐体）捐書以為詩失之野」（「後村大全集」巻九六「韓隠君詩序」）、「趙昌父云、古人以学為詩、今人以詩為学云々」（「鶴林玉露」巻九）など、多数の用例を挙げることができる。